九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「女國士」論 : 元曲「薛仁貴榮歸故里」との關連をめぐって

松岡, 純子
熊本大学 : 非常勤講師

https://doi.org/10.15017/9718

出版情報：中国文学論集. 17, pp.70-97, 1988-12-31. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

「女國士」論

――元曲「薛仁貴榮歸故里」との關連をめぐって――

松岡純子

一　はじめに

許地山晩年の作品「女國士」（一九三八）は、元々香港大學女子學生同學會チャリティ演劇の爲に執筆された戲曲であった。[1] 學内で三度上演され、好評を博して『香港大公報』「文芸」四三八―四四一期（一九三八、十一、十一・十三・十五・十六）に掲載された。[2]

從來、この「女國士」については、抗日戰爭期に書かれ、許地山の愛國主義を示す作品だという言及が爲されているだけで、作品論として正面からとり上げられてはいない。[3]

ところで、許地山は、この作品の『香港大公報』への掲載にあたって、「後記」を附し特に以下の點に言及している。[4]

(1)　「女國士」の登場人物を元曲「薛仁貴榮歸故里」から取出したこと

(2) 近代の多くの戯劇で演出される薛仁貴は、「説唐後傳」「征西演義」「薛家將平西諸傳」等の物語に基づくが、どの作品も妻柳氏が薛仁貴に從軍を勸めたことを略していること

(3) 『新唐書』本傳の記述にある〈柳氏勸夫投軍〉に重點を置いて脚色したこと

これらの點を特記した意圖は何だったのであろうか。

そもそも、許地山は「女國士」より先に、「我對於孔雀東南飛提議」[5]（一九二二）を書き、燕京大學女子學生による上演劇の服裝について意見を述べ、「中國文學所受的印度伊蘭文學底影響」[6]（一九二五）では、インド・イラン文學が宋元章回小説、元雜劇に影響していることを指摘した。又「梵劇體例及其在漢劇上底點滴」[7]（一九二七）では、サンスクリット劇の中國戯劇への影響を詳細に論じ、更に「印度戯劇之理想與動作」[8]（一九二九）、「近三百年來的中國女裝」[9]（一九三五）等も執筆している。これらの著作から、許地山が一九二〇年代から一貫して演劇に關心を持ち、比較文學の視點を有するとともに、元曲に學識が深かったことが知られる。

また彼の戯曲作品は「女國士」一作にとどまらず、他に「孤仙」[10]（一九二六）、「凶手」[11]（一九四〇）、「粵語劇木蘭」[12]（一九四〇）の三作がある。「狐仙」は、戀愛、結婚觀をめぐって愛と女性尊重を主題とする劇中劇仕立の作品である。「凶手」は、元曲「殺狗勸夫」の翻案戯曲である。「粵語劇木蘭」は、「木蘭從軍」に材を取ったもののようである。

右の二つの觀點から「女國士」を見てみると、この作品は抗日戰爭期に書かれ、愛國主義を表明する作であるとしても、それ以上に作家許地山の創作の流れから出て來たものと考えられる。全國的に名を知られた薛仁貴を素材

にしながらも、「說唐後傳」等の通俗演義からではなく、元曲から人物設定を取り、『新唐書』の記述を基に女性のほうに重點を置いて脚色したという許地山の「後記」の言葉を手がかりに、元曲「薛仁貴榮歸故里」と「女國士」の二作を比較分析しその翻案の仕方を問い直す必要があるのではないだろうか。

そこで本論では、まず史書の中の薛仁貴傳をふまえて、薛仁貴をめぐる一連の作品に描かれた薛仁貴及び妻柳氏を中心に人物設定を概觀する。その上で、人物設定とプロット・人物形象を軸に、元曲「薛仁貴榮歸故里」と「女國士」を比較檢討し、許地山が元曲及び史書を基に翻案執筆したという「女國士」の創作意圖と特質がいかなるものであるか考察する。テキストは、民國七年涵芬樓影印博古堂本『元曲選』[13]、『香港大公報』（マイクロ）を使用する。

二　史書の中の薛仁貴及び關連作品について

元曲や通俗演義・近代戲劇等に取り上げられた薛仁貴は、史書にはどう記されていただろうか。『舊唐書』卷八十三列傳第三十三の薛仁貴傳に依って彼の生涯を見ておこう。

薛仁貴は、貞觀末年（六四九）、太宗の遼東親征に際しての募集に應じ、將軍張士貴[14]の下で從軍した。安地城攻めで、白衣を身につけ戟と弓矢を手に戰功を立てた。後に萬年宮に幸した高宗を山津波の危機から救った。高麗と戰い單騎で敵の弓の射手を生けどりにし、契丹と戰い首領を擒にして官を得た。彼は突厥と戰う爲天山に向かう際、高宗の御前で弓の腕を試されたが、五重ねの甲を射拔く程の弓の名手であった。天山では三本の矢を放ち、たて續けに三人を射殺して敵を畏怖させ、勝利をもたらした。續けて高麗との戰いで扶餘城を落とし、平壤に入城、右威

衞大將軍、平陽郡公、安東都護となった。やがて吐蕃討伐の行軍大總官を命ぜられた。しかし彼の累進をねたむ副將郭待封[15]の命令違反によって吐蕃との戰いに敗れ、坐して除名された。いったんは庶民に身を落としたものの、後に高麗が叛くと再び用いられ、高麗・突厥等を次々に擊破した。病により年七十で死亡。死後、功績をたたえられ左驍衞將軍の位を遺贈され、その遺體は朝廷が仕立てた靈輿で鄕里にかえされた。

なお『新唐書』卷百十一列傳第三十六の薛仁貴傳に依れば、永淳二年（六八三）卒。

このように史實の薛仁貴は、邊境防衞に腕を奮い異民族の侵略と戰った英雄的武將であり、その起伏に富んだ生涯は樣々なエピソードに彩られている。ところで『舊唐書』にはないが、『新唐書』にのみ以下の記述がある。

薛仁貴、緯州龍門人、少貧賤、以田爲業、將改葬其先、妻柳曰、夫有高世之材、要須遇時乃發、今天子自征遼東、求猛將、此難得之時、君盍圖功名以自顯、富貴還鄕、葬未晚、仁貴乃往見將軍張士貴應募[16]

先に述べた薛仁貴の英雄性に加え、この柳氏のエピソードは、許地山は「說唐後傳」等に基づく近代の戲劇には略されているという。しかしそれ以前の古いいくつかの薛仁貴に關連する作品の題材として使われている。いま薛仁貴關連の作品を次に揭げ、これを◎印で示すことにする。なお○印は妻柳氏が登場する作品である。

〔1〕薛仁貴衣錦還鄕　『元刊雜劇三十種』[17]
◎〔2〕薛仁貴征遼事略　『永樂大典』卷五二四四[18]
◎〔3〕新刊全相唐薛仁貴跨海征遼故事　『明成化說唱詞話叢刊』[19]

○〔4〕摩利支飛刀對箭　『脈望館鈔校本古今雜劇』[20]
◎〔5〕賢達婦龍門隱秀　『脈望館鈔校本古今雜劇』[21]
○〔6〕薛仁貴榮歸故里　『元曲選』[22]
〔7〕金貂記[23]　〔8〕白袍記[24]　〔9〕征遼記[25]（明傳奇）
〔10〕定天山[26]　〔11〕射雁記[27]（清傳記）
○〔12〕說唐演義後傳[28]（通俗演義）
〔13〕異說征西演義全傳[29]（通俗演義）
〔14〕薛家將平西演傳[30]（通俗演義）
○〔15〕征西說唐三傳[31]（通俗演義）
〔16〕風花山[32]　○〔17〕柳迎春[33]
〔18〕三箭定天山[34]（京劇）
〔19〕獨木關[35]　〔20〕淤泥灣[36]　〔21〕摩天嶺[37]（京劇）
○〔22〕汾河灣[38]　〔23〕北詐風[39]　〔24〕樊金定罵城[40]（京劇）
〔25〕西唐傳[41]　○〔26〕棋盤山[42]　〔27〕陳金定[43]（京劇）
〔28〕馬上緣[44]　〔29〕三休樊梨花[45]　○〔30〕樊江關[46]（京劇）
〔31〕薛仁貴征東[47]　何穀天　一九三三
◎〔32〕女國士　許地山　一九三八

これらの作品のうち、元曲「薛仁貴榮歸故里」の人物設定に何らかの影響を與え得たと考えられる『元曲選』成立までの作品〔1〕〜〔5〕と〔6〕について、薛仁貴投軍の際の仁貴の父母及び仁貴と妻柳氏の設定を見ておこう。

薛仁貴の父母	薛仁貴	妻柳氏
死亡	被動的	勸夫投軍
〔2〕× ×	〔2〕薛仁貴	〔2〕柳氏
〔3〕× ×	〔3〕薛仁貴	〔3〕柳金定
健在	主動的	
〔1〕薛大伯・老旦	〔1〕薛仁貴	——
〔4〕薛大伯・婆婆王氏	〔4〕薛驢哥（仁貴）	〔1〕——
		同意
		〔4〕柳迎春
〔5〕薛大伯・婆婆李氏	〔5〕薛仁貴	勸夫投軍
		〔5〕柳迎春 二旬
〔6〕薛大伯・婆婆李氏	〔6〕薛驢哥（仁貴）二十二歲	同意
		〔6〕柳氏 ×死亡—該當ナシ

この中で〔1〕には柳氏は登場せず、『新唐書』の〈柳氏勸夫投軍〉の記述に沿うのは〔2〕〔3〕〔5〕である。但し〔2〕の柳氏が戰功を立て榮達する機會だとして仁貴との別れの悲哀を示さぬのに對し、〔3〕の柳金定は夫婦の恩愛を述べ別離後の仁貴を氣づかい無事に早く歸るよう言い含める形となっている。〔5〕の柳迎春は、積極的に仁貴の力量を認め投軍するよう勵ます。そして老父母に仕え暮らしをたてていく覺悟を懇切に述べ仁貴が留守宅の心配をせぬよう努める。〔4〕〔6〕は仁貴の投軍に同意し、父母に仕え家を守る覺悟を述べるにとどまる。なお〔1〕〜〔6〕は、仁貴投軍後の戰い

ぶりについて史實に記載された數々の戰いのエピソードをふまえている。但し〔1〕〜〔6〕で一貫して惡役とされる張士貴については、仁貴の功を横取りする史實はない。又〔5〕は柳迎春を主人公として、仁貴との出會いを物語化してふくらませ、仁貴投軍後は父母に仕え生活の苦しみに耐える賢夫人ぶりを描き他の作品とはプロット、主題とも大きく異っている。(48)

ともあれ、『新唐書』に記された〈柳氏勸夫投軍〉を題材とする作品が、少くとも『元曲選』成立以前に三作はあること、又、柳迎春をクローズアップした作品は「女國士」のみではなく〔5〕もそうであることを指摘しておく。(49)

次に、許地山が「後記」で言及した〔12〕以下の作品について、柳氏のエピソードが略されていったのは何故かを考える爲に、その作品內容を簡單に見ておきたい。

〔12〕では、薛禮（仁貴）と妻柳金花の出會いの部分が〔5〕の設定をうけついで更に物語化している。投軍の際、仁貴の父母は既に亡くなっており、柳金花は同意するのみであるが、仁貴との別離後、貧窮の中で子を產み育てる。但し、この作品で注目すべき點は、仁貴投軍後の戰いで、法術を驅使する者達が活躍し、又、戰いに敗れた敵が惡怪となって、歸鄉した薛仁貴に誤まって我が子を弓で射させる場面等が創作されている點である。

〔13〕〔14〕は今のところ未見。

〔15〕は、內容的に〔12〕の續編となっており、仁貴の子・孫を含めた三代にわたる征西物語である。仁貴は途中で死亡し、物語の比重は仁貴の子に移るが、この作品でも、法術を使い敵と戰う超英雄（スーパーヒーロー）が活躍するフィクションに變容している。

〔16〕〜〔30〕の京劇十五作は、これら〔12〕〜〔15〕の通俗演義の各回の見せ場に材を取っている。柳氏もしくは柳迎春は、〔17〕〔22〕〔26〕〔30〕に登場するがおおむね副次的な扱いとなっている。[50] 既に活劇の主人公として英雄化した薛仁貴に、〈柳氏勸夫投軍〉のエピソードは全くそぐわなくなっており、その爲に〔12〕以下の作品では、柳氏のエピソードは意識的に略されていったと考えられる。

〔31〕は近代の小説で、抗日戰を内容とするものである。これは、薛仁貴の物語が農村に流布していたことを示すとともに、抗戰と結びつけて薛仁貴を使った例である。

〔32〕については次章に述べる。

以上概觀した作品において、〔1〕〜〔6〕は一應史實の薛仁貴の戰いの事跡を下敷きに意識しつつ作品化されていた。これに對し〔12〕〜〔15〕にかけては、法術を驅使する者や仇を爲す魂靈の登場、スーパーヒーローの活躍等、〔1〕〜〔6〕には登場しない多くの人物が創造され、かなり虛構化が進んでいる。そして〔16〕以下の京劇はそれらフィクションの見所の各回を脚色し演じて、當時の薛仁貴像の流布に大きく關與していたといえるだろう。〔12〕〜〔31〕に窺われるような活劇の主人公として惡と鬪い打ち克つ英雄、侵略者を討つ正義の英雄が、薛仁貴の一般的イメージであったと思われる。乃ち許地山が「女國士」を書いた當時においては、薛仁貴といえば元曲よりも通俗演義から京劇等を通して流布したイメージを想起するほうがむしろ一般的であったことに注意しておかねばならない。そのイメージを利用して通俗的に改變しても良かったはずであるが、許地山はフィクション化した英雄のイメージを取らず、逆に省略されていった柳氏をとりあげたのである。

柳氏のエピソードが關連作品三作に使われ柳氏をクローズアップする作品も一作あること、通俗演義～京劇ではフィクション化した英雄(ヒーロー)薛仁貴像の成立と共に柳氏の影が薄くなっていったことに留意した上で、問題の二作の檢討に入りたい。

三　元曲「薛仁貴榮歸故里」と「女國士」

本章では、㈠人物設定㈡プロット㈢人物形象の三點にしぼって二作を比較していく。

㈠　人物設定について

薛仁貴の父：「薛仁貴榮歸故里」での薛大伯は、「女國士」の薛大伯に對應している。だが大きく異っている點は、前者では最後まで健在なのに對し、後者では途中で死亡することである。父の死という點では、二章の關連作品にあげた〔2〕〔3〕に符合するが、途中での死は、全く許地山の創作である。

薛仁貴の母：「薛仁貴榮歸故里」の婆婆李氏は、「女國士」の李婆婆に對應している。なお婆婆李氏は、先にあげた關連作の〔5〕に出ている。

薛仁貴：「薛仁貴榮歸故里」の薛驢哥（仁貴）二十二歳は、「女國士」の薛驢哥（仁貴）二十二歳にピッタリ對應する。なお薛驢哥という名は、先の關連作〔4〕に出ている。

薛仁貴の妻：「薛仁貴榮歸故里」での柳氏は、「女國士」では柳迎春二十歳となっている。柳迎春の名は關連作〔4〕〔5〕に出ているが、この名前と年齢をともに記すのは、關連作〔5〕である。

以上の主要人物四人は各々對應するが、「薛仁貴榮歸故里」に出て來るその他の登場人物は、「女國士」では全てカットされ、代わりに小偸（こそ泥）崔寶奴が創作されている。そしてこの崔寶奴が「女國士」の舞臺廻しの役割を担わされている。人物設定では「女國士」の薛大伯の途中での死、妻柳迎春の設定の具體化・明確化、崔寶奴の創作が「薛仁貴榮歸故里」とは異る。

㈡ プロットについて

「薛仁貴榮歸故里」のプロットは以下の通りである。

楔子：農務に努めぬ薛仁貴の武藝習練と投軍をめぐり、年老いて寄る邊なき身の父母が反對し引き止める。これに對し、薛仁貴は投軍の決意固く、父母を説得して出發する。この時、柳氏は、

大哥妾身在家情願替你侍養公婆你放心的自去[51]

と彼を送り出す。しかし夫婦の恩愛の情を思い、功名の爲別離せねばならぬことで、

旦做悲科詩云雖然是芳年連理爲功名只得離分[52]

と悲しみに沈む。

一折：薛仁貴が軍に身を投じ戰功を立てながら、上官張士貴に功をかたり取られる不運と、弓の腕比べに依る裁定を經ての逆轉が語られる。

二折：幸運が巡って來た薛仁貴に對し、故郷に殘した父母の怒りと悲しみが、薛仁貴の〈夢〉を通して對比される。

三折：歸鄕した薛仁貴を前に、村の者がそれと知らずその父母の苦境を引いて仁貴を惡しざまに言い、前折の〈夢〉での悲哀に對し笑いを誘う。

四折：嘆きつつ待ちわびる父母のもとに、薛仁貴が歸り、父母及び柳氏との再會を果たし、一家大團圓となる。この時、仁貴は、その功により、徐茂公の娘を賜って同伴しており、そこに封官賜賞の報せがもたらされ、一同聖恩を謝す、という構成である。

「女國士」のプロットは以下の通りである。（なお「女國士」は全一幕通し戲曲である。場面の展開に合わせて以下便宜的に㊀㊁㊂㊃としたのは筆者である。）

㊀：薛家の鷄を狙う崔寶奴と、崔を叱責する薛大伯の聲。續けて薛仁貴の父母と柳迎春が、農務を省みず武藝修練に勵み投軍を望む薛仁貴を巡って議論する。父は仁貴に不滿で強く反對するが、母は強制しえないことだと容認する。一方柳迎春は、仁貴の武藝の腕前と大きな志を認め、從軍しても敗れるはずはなく必ず歸って來ると、積極的な贊意を示す。

㊁：薛家の瓜を盜ろうとする崔寶奴と、庭先で午睡する薛大伯の姿。目を覺ました薛大伯が崔に氣づき、彼をこらしめようと追いかけて轉倒。そのまま死亡する。歸宅した薛仁貴は、父の死を前に、葬儀のことや殘される老母と妻を思い、從軍をやめようとする。ところが柳迎春は、

大哥請不用掛慮。……至于家里底零星費用奴手里雖沒有多少積蓄、若是織些布匹、做些針黹、也可以勉強度得下去。(53)（傍點は筆者に依る。以下同。）

と從軍を勸め、そして、

凡是有大志而不求達到底、便是庸夫、他只會做夢[54]

と仁貴を叱咤する。更に彼女は、

大哥不是個凡人、當然知道古來的大孝子是要立身建功、保衛邦家、若是早晩的請安、春秋的祭祀、不過是人子底末節、凡夫底常行罷了。如今邊彊這麼吃緊、寇賊這麼猖狂、做子民的須當以身許國、掃除夷虜、才是正理。[55]（傍線は筆者に依る。以下同。）

と說く。かくして薛仁貴は、改めて投軍を決意する。ここでの柳迎春のセリフは、元曲「薛仁貴榮歸故里」で、仁貴が父母を說得する爲に使ったセリフ

孩兒聞的古稱大孝須是立身揚名榮耀父母若但是晨昏奉養問安視膳乃人子末節不足爲孝今當國家用人之際要得掃除夷虜肅靖邊彊[56]

を引いている。

㊂：逃げようとした崔寶奴が、仁貴につかまり、樹にしばりつけられる。許しを乞う崔寶奴。一方仁貴の母は、父の死を理由に、仁貴の投軍に反對してこう言う。

打仗？打仗自有別的人去。短了你一個也不見得就不成。[57]

その母に仁貴は說く。

一個小偷來偷我們家底東西、便會教我們家里鬧出這個大亂子、不但丟了東西、並且喪失人口。……假如外

「女國士」論（松岡）

夷入我國土地、媽媽、您想我們要喪失多少東西、死亡多少人口？我們是種地底人、若是土地丟失了、豈不要白白餓死？種地底人們更應當上陣去保衛國土。(58)

㊃：崔寶奴が隙を見て逃げ出すが、仁貴に再びつかまる。仁貴は、崔も共に投軍させるべく連れていくことにする。嫌がる崔寶奴に柳迎春が說いてきかせる。

你不必害怕。奴信得過、你是可以跟你驢大哥去底、你想你這麼年青、又這麼聰明、若是肯立志、將來必定會成爲一個很有用的人。……若是你去從軍、這有立功底希望。你不但自己受人恭敬、連國家也有光榮。要知道爲人民底、捍禦外侮是他最高的責任。……(59)

崔寶奴はこの言葉と先の仁貴の話とを考えあわせてはっと悟り、

這是有用的身手。不錯、應當做有用的事。(60)

と從軍を決意する。柳迎春は重ねて

你底身體很強健、你底國家需要你。(61)

と勵ます。かくして、薛仁貴が、柳迎春を賢明なる女國士だとたたえ、一人一人の女性が皆このようなら天下は太平だと述べ幕となる。

以上、少し細かく二作のプロットを見たが「薛仁貴榮歸故里」と「女國士」を比べると、前者にとって楔子の仁貴投軍の經緯は全體の前置きに過ぎない。しかるに、「女國士」は「薛仁貴榮歸故里」の楔子のみを受け繼ぎ擴大して話劇仕立としている。この楔子の投軍の經緯に『新唐書』の記述を加味し、健在であった父薛大伯の突然の死

によって、仁貴のためらいと、母の投軍容認から反對への態度變化をひきだす。一方で、父の死をおして、なお投軍するよう仁貴に說く柳迎春の理性と意志性をうきたたせる形となっている。そして、話は崔寶奴の動きにつれて會話の主體が變わっていくことによって進行する。プロットの上から言えば崔寶奴の創作は舞臺上での話の進行を促す契機を作り出すのが一つの役割であろう。

㈢人物形象について

さてプロットを支える人物の形象はどうなっているだろうか。

「薛仁貴榮歸故里」の薛仁貴は、

您孩兒學成十八般武藝滿腹兵書、您孩兒一心要投義軍去……(62)但博得一官半職回來改換家門也與父母添些光彩不然只守着這茅簷草舍做個庄家豈不枉了一身本事(63)……您孩兒此去定要赤心報國展土開疆博個封侯拜將而回(64)……

と、武藝百般に通じた身を誇りに思い、投軍し戰功を立て官を得て家門を改めよう、名をあげようとはやっている。一方「女國士」の薛仁貴は、先に見たプロット㈡で、父の死の爲從軍をためらいながらも柳迎春の說得で心を決め、プロット㈢では、母の反對に對し道理をもって從軍の意義を說く。この薛仁貴は功名を得る爲にはやる者ではなく、殘される家族を氣づかいながら、地に生きる者として、みずからの地を守る爲、人任せにせずみずから起ち上がる人間となっている。そしてこの地に生きる者としての薛仁貴は、『新唐書』の薛仁貴傳にある〈以田爲業〉の記述、及び、「薛仁貴榮歸故里」の薛大伯の言〈俺本是庄農人家〉を受け繼いだと思われる。(65)

柳迎春はどうだろう。「薛仁貴榮歸故里」の柳氏は仁貴の投軍に同意して送り出す。だがその同意はあくまで

爲功名只得離分[66]

と被動的・受動的である。加えて彼女は夫婦の恩愛と別離の悲しみの感情に沈んでいる。しかるに「女國士」の柳迎春は、プロット㊀で、仁貴の大きな志と武藝の技量を信じ、父母の意に反し、自からの意見をはっきりと述べる。プロット㊁では從軍をためらう仁貴に、

一個家庭沒有男子却還可以過得去。……您當奴是什麼樣底女人、事事都要依賴男子？[67]

と言い、志を曲げず從軍するよう勵まし、理の立った話をして從軍の決意を固めさせる。プロット㊃で、崔寶奴に、人間に備わる有用性を自覺させ、行動次第で有用な人間となることを說く。この柳迎春はあくまで主動的・意志的で、かつ感情に流されず理智的である。仁貴の立志とその實行を促すべく、人に依賴せず自身の生活の自立を語るある理想の女性像として設定されている。「薛仁貴榮歸故里」の柳氏の受動性から「女國士」の柳迎春の主動性へと明らかに突出した人物形象に變えられている。

許地山の創作の手になる崔寶奴はどうだろう。プロット㊀㊁の冒頭にある如く、彼は機を見て利に走る小偸（こそ泥）として設定されている。そしてプロット㊂㊃の冒頭の如く、形勢次第で膝を屈することも、隙を見て逃げることもいとわない。これは一つには、當時一九三八年のイギリス占領下の香港にあって、抗日戰爭の高潮を耳にしながらも、日本による被占領の危機を目前にして、利によって、又形勢によって、どの勢力にでもつく奴隸的人間を反映させたものであろう。それはかつて臺灣割讓に際し、臺灣を去った許地山の一家が目擊した如く[68]、辛亥革命に

際し父南英が經驗した如く、(69) 更に中國東北地方の占領に際し北京で見聞した如くに。また一つには「竊小者」と「竊大者」の比喩として、「竊大者」をこそ擊たねばならない(70)ということをアピールする伏線ともなっており、仁貴が投軍を母に說得するくだりを、觀客を含めて、より強く納得させる設定とみなせよう。その上で、許地山は、柳迎春によるこの〈小偸崔寶奴〉の目覺め・改心を特に設定しているのである。この小偸の目覺めこそ、柳迎春の突出・薛仁貴の形象變化とあわせて、この作品「女國士」を解く鍵であろう。

許地山は「女國士」の「後記」に登場人物を元曲「薛仁貴榮歸故里」から取出したと言いながら、以上(一)(二)(三)に見たように、人物設定を絞り込み、プロットを大幅に削り、人物形象もかなり變えている。「薛仁貴榮歸故里」から「女國士」への薛仁貴像の變化、柳迎春の突出と理想化、及び小偸崔寶奴の創作形象とその目覺め、それぞれの人物形象の背後には、許地山獨自の主張と體驗が込められているのが見てとれよう。

四　許地山の創作作品における人物形象、及び雜感文に見る主張

ここで前章に述べた人物形象の背後にある許地山の主張を考えるにあたっては、彼の他の創作作品に示される人物形象がどのようなものであるか、又「女國士」執筆前後の彼の人間觀・文學觀を見ておかねばならない。

許地山の二十年余りにわたる作家活動において、創作小說・戲曲・童話に限ると、次の表の三十二作があげられる。

	作品（發表年月）	女性主人公、その他の女性	男性登場人物
I	① 命命鳥（一九二一、一）	○敏明	△加陵
	② 商人婦（一九二一、四）	○惜官	△我林蔭喬
	③ 換巢鸞鳳（一九二一、五）	○和鸞	△祖鳳
	④ 黃昏後（一九二一、七）	○承歡　承懽〈關山恒媚〉	△關懷
	⑤ 綴網勞蛛（一九二二、三）	○尚潔　史夫人	△長孫可望　史先生
	⑥ 無法投遞之郵件（一九二三、四）		
	⑦ 海世間（一九二三、十一）		
	⑧ 海角底孤星（一九二三、十一）		
	⑨ 醒醐天女（一九二三、十一）		
	⑩ 枯楊生花（一九二四、三）	○雲姑〈媳婦〉	×吳素霄女士
	⑪ 慕（一九二二、三）	○母	
	⑫ 讀『芝蘭與茉莉』因而想及我底祖母（一九二四、五）	○祖母	×大姑
	⑬ 在費總理底客廳裏（一九二八、十一）		○芙蓉
	⑭ 三博士（一九三二※）		×何小姐
II		〈新婚底妻子〉	△一個朋友
			△父
			△日輝（金思敬）
			△陳先生
			△祖父
			△費總理　△魏先生　老頭子

Ⅲ

⑮ 街頭巷尾之倫理（※）	○王綬底妻子	王綬	
⑯ 法眼（一九三一※）	女人（母）〈青年婦女〉（娘）	△紹慈	
⑰ 歸途（一九三一※）	○陳邦秀	邱先生	
⑱ 解放者（※）	×黃家蘭（加多伶）	△朴君	
⑲ 無憂花（一九三二※）	×↓●陳志能	△東野先生	
⑳ 東野先生（一九三二※）	○安惠 樂其生 一姉 樂我生 二姉 三姉	△張玄言理父	
㉑ 狐仙（一九二六、九）	○麟扯 ○↓×宣姑	△胡可爲	
㉒ 女兒心（一九三三、十～十一）	○陳情	△向高	
㉓ 人非人（一九三四、一）	○春桃	△李茂	
㉔ 春桃（一九三四、七）	○柳迎春	△薛仁貴	
㉕ 女國士（一九三八、十一）	○玉官 杏官〈雅言〉 ×黃安呢	△崔寶奴	
㉖ 玉官（一九三九、二～五）		△糞掃（李慕寧）	
㉗ 無法投遞之郵件（一九四〇、一）		△建德	
㉘ 凶手（一九四〇、四）		△陳廉	
㉙ 危巢墜簡（一九四一※）	○楊氏 王婆、梅香	△孫華	
		孫榮	

㉚ 鐵魚底鰓（一九四一、二）		○兒媳婦	雷先生
㉛ 螢燈（一九四一、六～七）	○玉華		△難生
㉜ 桃金孃（一九四一、七～八）	○金孃	×銀姑　姑母	△衆人

注　Ⅰ：創作集『綴綱勞珠』（上海商務、一九二五、一）所收分。
Ⅱ：創作集『解放者』（北京星雲堂、一九二三、四）所收分。
Ⅲ：『危巢墜簡』（一九四七、四、初版―香港兆利、一九七七、六、重印）所收分（『解放者』との重複分を省く）及び集外作品。
※原載誌不明。○×△同系列の人であることを示す。＜　＞死亡。――該當者なし。

三十二作中、五作は特定の主人公は登場しない。殘り二十七作中、二十二作は女性が主人公である。副主人公を含めて女性が作品全體を規定する役割を與えられているものは、二十六作にのぼる。表中の○印と×印は、同系列の女性であることを示す。○印の女性は、(1)苦難との遭遇(2)苦難克服への努力奮鬪(3)苦難に抗して自立性・主體性をもつ、という共通項をもっている。個々の女性にはもう少しバリエーションがあるが、おおむねこれらで概括される。×印の女性は、(1)富裕(2)自己中心的(3)男性を從わせる活力・エネルギーをもつことで概括される。又、これらの作品中、二十二作に愛もしくは敬意故に女性を尊重し女性に從う男性の形象が描かれている。表中の△印をつけた男性がこれである。しかもそのうち十七作の男性は、何らかの形で女性の感化を受けて目覺め變化し、女性に

従う男性なのである。許地山の創作傾向として、ある理想像に近い女性像を提示し、あわせてその女性の生き方による導き、或いはその女性への愛によって目覺める男性像を提示する作品が多いことが指摘できる。

この苦難に抗し自立する理想の女性像の提示については、許地山の女性觀が大きく作品を規定しているであろう。ここでは指摘にとどめ彼の女性觀にはふみこまないが、彼の生涯事項のうち以下の事柄が彼の作品中の女性像に影響を與えていると考えられる。禮教を輕んじた爲婚家を追われ實家にかえされた祖母の愛情悲劇、[71] 八人の子供を抱えながら夫南英の孤高ともいえる行動を終始支え續けたかなり氣文であったらしい母の存在、[72] 兄弟姉妹のうちとりわけ仲の良かった姉及び妹の父による包辦婚と婚後の早逝、[73] 許地山自身の最初の妻林月森の女兒を殘しての早逝、[74] といった事柄である。これらの身近な女性達の生き方と死は、逆に許地山に、どのような苦難の中でも流され諦め嘆くことなく、自主の見をもちみずからを律し主體的に生きてゆくあるべき女性の理想の姿を育くんだと思われる。

ところで、「女國士」の柳迎春も、先にあげた○印の女性の系列に數えられるのである。又、父の死をおして投軍を決意する薛仁貴も目覺める崔寶奴も、女性に感化される△印の男性の一人に數えられる。二章にあげた『新唐書』の〈柳氏勸夫投軍〉の記述は許地山が「女國士」を執筆する直接の契機であったが、柳迎春も薛仁貴も、それだけに依った人物形象ではないことがここで言えるであろう。

それでは、そのようにある理想像とその他者への感化を提示しようとする許地山の意圖は一體何だったのであろうか。

「女國士」執筆前後に、許地山は、時局をめぐる多量の雜感文を新聞や雜誌に發表している。その中で彼の人間觀・文學觀が示されるものとして以下の著作に注目したい。

「英雄造時勢與時勢造英雄」[75]（一九三八、三）における彼の主張はこうである。時勢に迫られて起ち上がり結果としてたまたま英雄と呼ばれるようになった者は、時勢が變わればその時勢に從って變質墮落すると指摘した上で、眞の英雄の概念に觸れて言う。人間が自己を制御し發展させること（セルフコントロール）ができるようになり、眞の平等が實現した社會においては、一人一人の人間が自衛力を持ち、人々の爲に自己を犧牲にしうるようになる。その時、一人一人が時勢を造り左右する真の英雄となると述べ、一人一人がそのような眞の人間・眞の英雄となることを求めている。

「『硬漢』序」[76]（一九三八、十二）においては、人間性が壓迫されている狀態の下で、人間がどのようにもがき壓迫を克服していくかを描き、讀者に眞の人間性を培わせるものこそ〈養性文學〉であり、その〈養性文學〉が今必要であると說いている。

「七七感言」[77]（一九三九、七）では、自救・自存・自決しうる人間、正義と人道の實現に努める人間となるよう青年を助け導くことが急務であると述べている。

「國慶日所立底願望」[78]（一九三九、十）では、人間は知識に加えて文藝の陶冶があって初めて眞の性情を有する人間となりうるのだという文藝觀を述べ、民族の眞の性情を培う文學を供給すべきであると說いている。

そして「今天」[79]（一九四〇、七）において、文學者の任務は民族の意志力を強め知識と理想の培養を行うことであ

ると主張している。その上で、我々自身の抵抗と建設は、我々自身の力で行うものであり、わずかでも依頼心があれば、奈落の底に落ちるであろうと、くり返し個々の人間の自立を説いている。

「女國士」の人物形象の背後には、このような自立した主體として人間を把える人間觀、及びそのような自立せる眞の人間となるよう促すのが文學であるという獨自の文學觀が込められていたのである。許地山は、「女國士」において、自己の考えをもち他を感化する柳迎春や、ためらいを脱し人をあてにせずみずから自衛に起ち上がる薛仁貴にある理想の人間像を描いた。しかしそれだけにとどまらず、小偸崔寶奴の目覺め・改心を設定し、たとえ小偸であっても人としての價値をもち、志を立て自覺して起ち上がれば、人としての尊嚴をもつ眞の人間となりうるはずだという人間觀をも表明したのであろう。

五　結び

一九二七年の『小說月報』十七卷號外「中國文學研究」には元曲關係の論文が六篇まとめて掲載されている。うち一篇が、本論一章にあげた許地山の論文「梵劇體例及其在漢劇上底點點滴滴」である。彼はその前年までイギリスに留學（一九二四、八～一九二六、九）しており、この論文は一九二五年十二月にオックスフォード大學のインド學院で書き上げられている。彼の元曲への注目は、鄭振鐸らの俗文學資料の收集の動きとも關連しているであろう[80]が、この論文から、許地山がオックスフォードでの各國の研究者との交流を通して、元曲をインド・イランといった中央アジア・西南アジアにまたがる戲劇の傳播の中で、世界文學の中に位置づけて比較し再評價すべきだと考え

たことが窺われる。

許地山は「女國士後記」で元曲を前面にあげ『新唐書』に言及することにより、フィクションの中の超英雄（スーパーヒーロー）ではなく、實在の邊境防衛に奮闘した歴史的英雄を想起させ、又元曲自體を世界文學の中で再評價する意圖を含みつつ先行する元曲「薛仁貴榮歸故里」の作品イメージを喚起させ、この楔子のみを擴大した一幕話劇「女國士」に內容的ふくらみを與えようとしたのではないだろうか。前者の歴史性・世界性・內容的擴がりをふまえた上で、「女國士」の骨子は、柳迎春というある理想の女性像及び薛仁貴・崔寶奴といった人物形象の提示を通して、許地山自身の意志的・理智的・主體的人間觀を表明することにあったと思われる。そして、このようなある理想の女性像及び人間に備わる變化向上の可能性を示すことによって、觀客（讀者）に、理想に向けての一人一人の努力と向上を促し、人に依賴せず時勢の奴隷とならず自立せる人間となるよう、眞の主體としての人間となるよう呼びかけたのではないだろうか。

このように個々の人間の主體としての自立を求める許地山には、五四文學以來の課題、人間の確立がついに果されぬ近代は、暗黑と絶望の死水にすぎぬという認識があったと考えられるが、これは今後の課題としたい。

注

（1）「女國士後記」・『香港大公報』文藝四四一期（一九三八、十一、十六）。

（2）「編者按」・『香港大公報』文藝四三八期（一九三八、十一、十一）。

（3）胥端甫「許地山之生平及其著作」・『台灣文獻』十五―一（一九六四、三）。
薛綏之「論許地山」・『除州師範學院學報』一九七八年三期。
王文英・朱立元「略論許地山的創作」・『中國現代文學研究叢刊』三期（一九八〇）。

宋益喬「〝落花生主義〟與許地山的后期創作」・『文學評論叢刊』三十三期（一九八五、二）。

（4）　注（1）に同じ。

薛仁貴底名字全國都知道。關於他底事跡底戲劇很多、現存最古的劇本也許是在元曲裏底薛仁貴榮歸故里雜劇。本劇底人物、除寶奴以外、都是從這劇本取出底。近代許多戲劇、所演出底薛仁貴都是根據說唐後傳、征西演義、薛家將平西諸傳、等書底故事。但薛仁貴底從軍是由於他底妻柳氏底勸勉、從前的作家都勿略了這一點。唐書（卷一百十一）本傳載：「……：」柳氏在唐書裏沒有名字、通俗稱她爲迎春、不知所本。仁貴小名驢哥、雖不見於唐書、在元曲裏却是用這名字。今京劇汾河灣作薛禮、「禮」也是「驢」底變音。本劇注重在柳氏勸夫投軍、其它脚色不過是陪襯而已。

（5）　『戲劇』二―三（一九二三、三）。

（6）　『小說月報』十六―七（一九二五、七）。

（7）　『小說月報』十七卷號外（一九二七、六）。

（8）　『戲劇與文藝』一―二（一九二九）未見。

（9）　『天津大公報』藝術周刊三十四～四十四、（一九三五、五～八）。

（10）　『小說月報』十七―九（一九二六、九）。

（11）　『宇宙風』百期紀念號（一九四〇、十）。

（12）　原載誌不明。周俟松「許地山年表」（『中國現代作家選集許地山』三聯書店、一九八二、四）に依る。未見。

（13）　Oriental Collection, Menzies Library の「總督部立圖書館圖書目錄中文部第九部分、許地山教授寄存中文新舊版書籍目錄」に依ると、許地山所藏の『元曲選』は、民國七年涵芬樓影印本である。他に『曲苑』（民國十年鉛印）、『曲譜』（民國八年掃葉山房影印）を所藏。

（14）　『舊唐書』卷八十三列傳三十三。『新唐書』卷九十二列傳十七。かつて忽峠賊と呼ばれた盜賊であったが高祖に歸順し戰功を立て將軍となった。

（15）　『舊唐書』卷八十三列傳三十三。『新唐書』卷百十一列傳三十六。

〝待封嘗爲鄯城鎭守、恥在仁貴之下、多違節度〟（中華書局排印本『舊唐書』二七八二頁）

（16）　中華書局排印本、四一三九頁。

（17）　『古本戲曲叢刊四集』影印。

（18）　永樂三～六（一四〇五～〇八）。

（19）　成化元～二三（一四六五～八七）。

（20）　『古本戲曲叢刊四集』影印。

（21）　同前。

（22）　萬曆四三～四四（一六一五～一六）。

（23）　『古本戲曲叢刊初集』影印。

(24)　同前。明初戲文。
(25)　『古典戲曲存目彙考』(莊一拂編著、上海古籍出版社、一九八二、十二增訂版)に依る。
(26)　同前。
(27)　『元明北雜劇總目考略』(趙景深主編・邵曾祺編著、中州古籍出版社、一九八五、六)の關連項目の記述に依る。
(28)　觀文書屋刊本『重刻繡像說唐演義後傳』五十五回。乾隆四十八年刊。
(29)　『增補中國通俗小說書目』(大塚秀高編著、汲古書院、一九八七、五)に依る。未見。
(30)　同前。大塚秀高先生の御敎示に依れば、大連本が「混唐後傳」(一九八二、四、春風文藝出版社)として出版されている。
(31)　十卷八十八回(寶文堂書店、一九八七、八)。
(32)〜(46)『京劇劇目初探』(陶君起編著、中國戲劇出版社、一九六三、三、初版/一九八〇、八、增補重印)に依る。
(47)　文學叢刊『分』(文化生活出版社、一九三五、十二)所收。
(48)　この作品には、史實にはないが、戰功によって仁貴に元帥の娘を賜わる設定が付加され、[6]にもうけつがれている。
(49)　『永樂大典』については、イギリス留學中大英博物館で目を通した可能性がありうる。『脈望館鈔校本古今雜劇』については、鄭振鐸が敎育部の爲に購入したのが一九三八年五月のことである。鄭は購入に先立ち、この書の所在を知った時點で、當時香港にいた北平圖書館長袁守和に電報を打ち購入の件を打診している。北京での學生時代から親しく共に文學研究會で活躍していた香港の許地山にもこの消息は傳わったと考えられうる。『鄭振鐸年譜』(書目文獻出版社、一九八八、三)參照。
(50)　但し[17]のみは[12]での仁貴と柳氏の出會いと別離の經緯を主題としている。
(51)　雕蟲館校定『元人百種曲』博古堂藏板、涵芬樓影印、商務印書館發行、三葉。
(52)　同前。
(53)　『香港大公報』文藝四三九期(一九三八、十一、十三)第四段。
(54)　同前、第五段。
(55)　同前。
(56)　注(51)に同じ。二葉。『孝經』卷第一、開宗明義章一、〝立身行道揚名於後世以顯父孝之終也。〟
(57)　『香港大公報』文藝四四〇期(一九三八、十一、十五)第四段。
(58)　同前、第五段。
(59)　『香港大公報』文藝四四一期(一九三八、十一、十六)第五段。

(60) 同前。
(61) 同前。
(62) 注に(51)同じ。二葉。
(63) 同前。
(64) 同前、三葉。
(65) なお二章にあげた關連作〔12〕の薛仁貴は、裕福な典庫を營む父母の下に生まれている。
(66) 注(51)に同じ。三葉。
(67) 注(53)に同じ。四～五段。
(68) 『我底童年』(香港進步教育出版社、一九四八、十、再版)。
(69) 『窺園先生詩傳』・『窺園留草』(一九三三、六、私家版/『台灣文獻叢刊』一四七種、一九六二、九)所收。
(70) 許地山「法眼」(一九三一)參照。『解放者』(北平星雲堂書店、一九三三、四)所收。
『莊子』、十、胠篋〝彼竊鉤者誅、竊國者爲諸侯〟。
(71) 「讀〝芝蘭與茉莉〟因而想及我底祖母」・『小說月報』十五―五、(一九二四、五)
(72) 注(68)に同じ。
(73) 注(68)に同じ。
「窺園先生自定年譜」(注(69)同書に所收)
(74) 洗耳「地山死了!――一個老友口中的許地山先生――」・『中國文藝』二五期、五―一(一九四一、九)。
王皎我「關於許地山先生底幾件小事」・『追悼許地山先生紀念特刊』(一九四一、九)。
鄭振鐸「悼許地山先生」・『文藝復興』一―六(一九四六、七)。
(75) 『大風旬刊』三期(一九三八、三)。
(76) 大華烈士譯『硬漢』(一九三八、十二)への序。『雜感集』(上海商務印書館、一九四六、十一)所收。
(77) 『香港大公報』一九三九、七、七。
(78) 同前、一九三九、十、九。
(79) 同前、一九四〇、七、七。
(80) この頃、鄭振鐸は、「中國小說提要」を『時事新報・鑒賞周刊』(一九二五、五、十一創刊)の二期から連載しており、十期(一九二五、八、十)には「說唐後傳」「說唐征西伝」を載せている。又、彼が元曲資料の收集に努めたことは注(49)に言及した通りである。
なお參考の爲、二章にあげた關連作品の人物對照表を掲げる。

(人物)

	〔1〕元刊本	〔2〕永樂大典	〔3〕新刊全相	〔4〕脈望館摩利支	〔5〕脈望館賢達婦	〔6〕元曲選	〔32〕女國士
正末	薛大伯	×	×	老孛兒 薛大伯	薛大伯	正末 薛大伯	薛大伯→×
老旦		×	×	卜兒 婆婆王氏	婆婆李氏	卜兒 婆婆李氏	李婆婆

外末	薛仁貴		薛仁貴	薛仁貴	正末	薛驢哥（仁貴）		薛仁貴	冲末	薛驢哥（仁貴）二十二歲	薛驢哥（仁貴）二十二歲
			柳氏	柳金定	旦兒	柳迎春	正旦	柳迎春二旬	旦兒	媳婦兒柳氏	柳迎春
外淨	張士貴	莫離使	張士貴	張士貴	淨	張士貴	淨	張士貴	淨	張士貴	小偷 崔寶奴二十歲 十八歲
		葛蘇文	劉君昂	劉總官							
正末	杜如晦	鄂國公	太宗	太宗	莫利支葛蘇文	摩利支	摩利支	盍蘇文（葛）	摩利支	葛蘇文	
		英國公	昌黑飛	昌飛黑		葛蘇文					
		敬德	蘇萬徹	蘇萬徹							
		李世勣	房玄齡	房玄齡				房玄齡			
		薛延陀	杜如晦	杜如晦					正末	杜如晦	
		秦懷玉	胡敬德	胡敬德			冲末	徐世勣（茂公）	外	徐茂公	
		秦叔寶	秦叔保	秦叔保		徐世勣（茂公）		徐世勣（茂公）			
		胡國公	薛延陀	薛延陀							
		程咬金	秦懷玉	秦懷玉							
		……	咬金	咬金							
正末	板禾伴哥兒					探子	正末		淨	梅香	丑
									李老兒	柳員外	禾旦伴哥

（地點）					
	柳氏老母親 柳氏哥哥 柳氏嫂嫂	卜兒　婆婆李氏 大末　柳大 大旦　媳婦張氏 旦兒　李元師之女	小旦　徐茂公的女 孩兒	×死亡 ——該當者ナシ	
大黄莊 分曲村	大黄莊 分曲村	降州龍門鎭 大黄莊	降州龍門鎭	降州龍門鎭 大黄莊	降州龍門鎭 大黄莊

（附記）この論稿を爲すにあたり、野口宗親先生の懇切な御教示をいただき、關連資料については岩松久雄・佐藤保・代田智明の諸先生方の御協力をいただきました。心から御禮申し上げます。なお、私事にわたりますが、この論稿を亡き父に捧げます。（一九八八年九月）